

傲慢な俺的オリジナル小説のススめエッセイ風味

初めまして、俺です(お。

この頁では、世間一般にオリジナル小説とか、創作小説とか素人小説とか言われるものを皆で書いてみませんか？というのを第一目的として、あくまで偉そうにあくまで大雑把に、その書き方の一例を紹介していきます。ぶっちゃけ、ゲームとは99%関係ない内容です(爆)。しかしながら、他に書くこともなく、取りあえず何か書いて提出しろ、とのことだったので、まあ、こんなでも出さないよりはましか、と思って書き殴ったのがこの文章です。

<最初は全然関係ない話から>

皆さんは物語が好きですか？俺は大好きです。その範囲は、ジャンルを問わず、ミステリ、恋愛、サスペンス、ホラー、SF、何でもござれで、「面白」ければ、どのような物語でも受け入れますし、愛します。その物語の媒体として、テレビドラマや映画や漫画なんかも好きですが、あえて一つを選ぶとすれば、やっぱり小説が一番好きです。理由は単純で、小説があらゆる物語の表現メディアの中で一番自由だと思うからです。自由というのは別な言い方をすれば、束縛されていない、ということですので。確かに、アクション系のもなど、視覚を利用しないと分かり辛い物語もありますが、それは読者の想像力次第である、と思います。詰まるところ、小説の世界は読者の想像力次第ですが、文字だけの小説は、読者によって、三者三様のイメージが出来上がるんです。

俺は、小学校低学年の頃、小説と出会いました。気がついたら、出会ってました。小学校時代のある時期は、まさしく、小説と共に生きていた、といったも過言ではないぐらいに読んでいました。中休みに図書室で小説を借り返して、放課後までに読みきり、読んでいた小説を返り、新しい小説を借りて帰ってから家で読み、次の日の中休みに返してまた借りると、と本を書いた著者に失礼な極まりないことをしていました。もっとも、図書室においてあるのは小学生向けの太厚みがないものだったから、このようなことができたんでしょうが。その甲斐もあって、その年には、図書室で一番本を借りた人、とかいう良く分からない賞をもらいました。そのときもらった賞品のしおりは……とっくに自分でなくなってしまいました(泣)。そこから後は、その時ほどではないですが、コンスタントに本を読み続けました。自分で言うのもなんですが、飽きっぽい性格である俺でも、小説を読むことだけは全く飽きなかったんです。それでいいですね。小説を読むことが大好きな人は分かって思うんですけど、ある時期を境に、読むだけでは満足できなくなりました。そうなんです。小説を実際に自分で書いてみたくなかったんです。

今でももう書くか聞かなくても覚えています。ある時、ある瞬間に、涙を流すほどに感動的な、あるいは感心するほどに面白い名作に出会うと、自分もこんな風に人の心を動かせるような、そんな小説を書いてみたい。そう考えるようになると、少なからずいるのではないのでしょうか？俺はそうでした。もうあまりに昔でいつのことだか忘れてしまいがちですが、ある日、急に、小説を書きたくなくなって、ノートを広げて、シャーペンを持ったんですね。ところが、全く書けない。これがもう全然。書き出しをしようとしても、何も浮かんでこない。当時は、小説を書くために必要な作法や技術なんてものは全く知りませんでしたから、勿論プロットなんて言葉も知りません。いきなり、書き始めちゃったんです。今でこそ、そんなんで書けるはずはない、なんてことは分かっていますけど、当時(今よりは)強情だった俺は、何とか形にしようとしたんです。その結果、出来上がった作品が俺の処女作になるわけですが、それはもう小説と呼べる代物ではなく、なんと言いますか、文字通り、カスな作品だったわけですね。それこそ、今読み直したら、顔でやかんを沸かしながら、バイト先で「俺はやかん人間です」と叫びまわると同じくらい恥ずかしい出来で、本当ならば即刻打ち首になるようなものなんですけど、どういうわけか、今でもダンボールの奥底に保管してしまっているわけですね。人間、思い入れのあるものは中々捨てられないもので、故に人間は弱い生き物であると言った人が誰かいましたね。まあ、どうでもいい人ですけど(お。

そして、今でも小説を書いてます。だから、素人物書き歴は中々に長いわけですね。それでも、自分が納得できるものを書けたことは、一度としてありません。他人が読んで本当に面白いだろうなあ、と思えるような作品を書けたこともありません。ここまで、小説が書けないとなると、俺って才能ないんだな、と逆に開き直ってしまいたくなりませんが、小説の世界はそういうものではないんです。

小説は、努力の産物です。確かに、才能も必要ですけど、より面白い小説を書くために一番重要なファクターは、継続と努力です。才能がないんだ、と思うのは簡単ですけど、それで終わりではあまりに不毛です。何も生まれませんし、育ちません。小説を書き続けることは、実は途方もない意思が必要だと思えます。だけど、その継続の先にあるのは、決して小さいものではないはずだと、俺は信じています。だから、例えば小説が下手でも、スランプに陥って書けなくなっても、小説を書く意思だけはなくすまいと、心に誓っているわけです。

長々と書きましたが、結局何が言いたいからと、ぶっちゃけて、俺は小説が余り上手に書けません。むしろ、下手糞です。だけど、書きます。書きたいからです。貴方も、書いてください。多分大半の人はかなり長い期間、下駄糞な小説しかかけないでしょうが、それを続けてください。そうすれば、きっと、努力は報われるはずなんです。そういう願いをこめて、このような*****なエッセイを書いていられるわけですね、ハイ。

フランス人の作家でロマン・ロランという人がいます。彼は、こんな言葉を残しています。

「人はおむね自分で思うほどには幸福でも不幸でもない。

肝心なのは望んだり生きたりすることに飽きないことだ。」

作家としての彼が、どのような気持ちを持ってこの言葉を残したかはわからないですけど、俺達も、望んで小説を書けたらいいと思います。そして、いつか自分の満足できる作品を書けたら、どんなに最高か、考えただけで心が震えますね。

<次も全然関係ない話ですよ>

ここまで、読んでくださった人は分かると思うんですけど、俺は小説至上主義的なところがあります。他の大抵の娯楽よりも、小説を優先するところがあります。小説は一生読んでいきたいですし、できれば書いていきたいです。でも、X68に属していることからも分かると思いますけど、俺はゲームも大好き。まあ、若干小説の方が好きな割合が強いんですけどね。ぶっちゃけて、言いますとね、正直芸芸部に入りたかったのですよ。本当は。しかしながら、わが大学には何故か芸芸部がないんです！よって、今現在、こうしてX68とかいうオタサークル(ひどっ)に所属している次第でありまして。いや、私生活では小説は書いていますけど、ゲーム制作活動なんかほとんどしていませんけどね(おい)。だって、バイトとレポートやったら時間ないですし…。あ、でも、一応作ってはいます。エレメントというアクションパズルです。来年お見せできたらいいんですけどね。気が長い話ですね。

<ようやく本筋です…>

先に断っておきますけど、この文章のタイトルからも分かるように、これは「俺的」オリジナル小説の書き方です。よって、世間一般で言われるものなどとは異なりますし、必ずしも小説が書けるようになることを保障するものではないです。ですけど、少なくともこれから書くものは、俺が小説を書くときに、心がけているものです。(一応)経験に基づいて書いています。少しでも、参考になればいいと思っています。

俺的オリジナル小説を創作するにあたって、大まかな流れは、

無題

1) 見た人が面白そうだと思うような紹介文を書く。
2) その紹介文を広げて大まかなプロットを書く。
3) プロットを元に小説を書く。
要約すればいい感じですが、
俺的オリジナル小説は「少くとも書く意欲を無くさない」ことを念頭に入れてあります。ようするに、小説として形の残るものを書ききることを目的としています。
1) 見た人が面白そうだと思うような紹介文を書く。
紹介文は普通、作品が出来上がった後に書くものだと思います。確かに、その通りではあるんですけど、俺はそれだけであるとは思いません。俺的オリジナル小説では、紹介文を、プロットの前の段階と位置づけて考えています。言い換えれば、プロットよりもさらに大雑把に物語の枠組みを組み立てる段階です。なんで、そのよなことをするかというと、小説を書いたことほとんどない人は、意外と書きたいネタをたくさん持っているものなんです。とりあえず、気持ちでプロットから書き始めると、そのどれもこれも詰め込みたくなくて、結果的に、内容に収拾がつかない、グダグダな作品になってしまうんです。初心者が小説を書ききれない理由は、これが多いみたいです。面白い小説というのは、得てして本裏の紹介文が面白く、魅力的なものです。紹介文とは（オチを隠しながら）本編の内容を要約したものだから、紹介文がきちんと書ければ、実際に小説を書いたとき、しっかりとまとめられる可能性が高くなります。なおかつ、諸説の全体像が見えていけば、途中で何を書くべきが分からなくなる、ということも少なくなりますし。

2) その紹介文を広げておまかなプロットを書く。
さて第2段階です。プロットは、文字通り、おまかにかきます。かといって、主要な（自分ももっともこだわりたい）部分と、起承転結はしっかり書きます。それ以外の部分は大雑把に書いても大丈夫、ということです。何度も言っているように、俺の経験より、素人が小説を書く上で最も気をつけなければいけないことは、冗長にならない（ぐだぐだにならない）という事です。自分が長い時間温めてきた色々なアイデアを入れたいという気持ちは分かれますが、取捨選択をしっかりとっておかないと、物語の本質がぼやけてしまいます。加えて、名前付きの登場人物は必要最低限にとどめておく、ということが挙げられます。そうすることで、物語の登場人物に対して感情移入でき、面白いと高まっていますし、くどいという感じが減らすことができます。実際、世間で面白くいわれている小説を見てみるとそのような傾向にあることは容易にうかがえるはずです。逆に、やたらめったに登場人物ばかり増やして、お互いがお互いの良さを打ち消してしまうような小説は、つまらないです。大切なのは切れ味です。活字だけで読者を物語の世界に巻きこまなければならないのですから、読者の心をスパッと一刀両断できる、小説とはそのように創らなければならないのです。

3) プロットを元に小説を書く。
いよいよ、本番です。1)と2)をしっかりとやっていると、最初の一行目をすらすらと書けるはずで、す。逆に、一行目からいきなり書けない人は、1)と2)をやり直してください。小説は基本的には最初の部分から書き始めたほうが良いと思いますが、小説はどの部分から書き始めてもかまわないと言われますが、それはある程度経験をついた人だから言える言葉です。初めて小説を書く人や、片手で数えられるくらいしか小説を書いたことのない人が最初に「転」や「結」を書いても、全体的にちぐはぐになってしまう可能性が高いです。一般論から言っても、素人小説の世界では、「冒頭」で、その人の小説の程度が判断される傾向にあります。なにしろ素人小説なんてものは星の数ほどあるものですから、いちいち全文を読んでもなんかないわけですから。最初の数行を読んだだけで、その人の小説のレベルは（素人目でも）分かるものなんです。冒頭で魅力を感じられないと、結果、その小説全体の魅力がない、と判断されてしまいます。素人小説における最初の到達地点とは、「知らない誰かに最後まで読んでもらう」ことです。読んでもらえるからこそ、感想をもらえるのであり、それを踏まえて加筆修正するべきこともできます。プロの作家です。さても、何回も何回も加筆、修正を行うのです。ときには、100ページほどの原稿をこぼさりと切り捨ててしまうこともあるくらいです。素人の我々が、始めから、「一般人が期待するべきレベルの小説」を書くことなど始めから無理な話です。とりあえず「知らない人が読んで苦痛にならないレベル」の作品を書き上げてください。中味の良し悪しは、それで貴方もようやく本当の意味での素人小説家としてのスタート地点に立てるの（ハズ）です。

<補足みたいなモノ>

少し細かい部分での、素人小説を書くにあたっての注意点を挙げておきます。

・最低限の文法は知っておくべし。

基本的な三点リーダーの使い方や、行間の取り方、文頭一マス空けなどはしって然るべき常識です。たまに、特殊な使い方をするプロの作家さんいますが、素人たるわれわれは基本を守って正しい文法を使うべきだと思います。沈黙を表す三点リーダーの「……」を「・・・」などと書いてしまう人は、もう一度最初から作法を見直しましょう。

・処女作は短編を書くべし。

処女作にいきなり長編・中編を書くような無謀な人は（おそらく）いないと思いますが、一般に、ショートショート（以下SS）と呼ばれるもの（原稿用紙10枚以内）を処女作として書くことも、おすすめしません。というより、やめたほうがいいです。SSを書くことと、短編～長編をかくことはいろいろな意味で「全く別の作業」と思ってください。大は小をかねるといいますが、小は大をかねません。ショートショートがかけても短編が下手糞な人を、それこそ俺は星の数ほど知っています（俺も含めてorz）。最初の一步でSSが少しくまできてしまうと、その人はSSから抜けられなくなってしまう。SSはいろいろな意味で「無駄」を省いたものです。俺達はその無駄を無駄ではないものに昇華させる過程で学習するのです。最初から無駄が少ない、あるいは存在しない作品は、一部分において以外は勉強にもなりません。オチのつけた、起承転結の運び方も、SSとそれ以外では異なっているのですから。

<本筋の方が短いと言わないでね>

最後に、数行。小説は大きく分けて三つに分かれていることを知っていますか？とは言っても、俺が勝手に分けているんですけど。

世間一般でどうだかはわかりません。その三つとは、一般小説（大衆文学）、ライトノベル、純文学です。最初の一般小説とは、一意的に、ライトノベル、純文学に属していない小説、としてここでは定義しています。

さて、小説、ライトノベルがなんであるかは多分分かると思いますが、純文学というものを知っていますか？これは、大衆文学に対して、純粹な芸術性を目的とする文学です。その内容にも、色々ありますが、一般的には「つまらない」ものが多いです（爆）。つまり、一般受けしないものが多いのです。俺も昔後学の為に読もうとしたことがありましたが、途中で断念しました。中学や高校時代の、古典文学のうちの、より面白くないものの現代版、とでも考えてください。はっきり言って、難解です。中には面白いものもあるかもしれませんが、少なくとも俺は未だ巡り合っていない（お）。

ライトノベル（ヤングアダルト）は、知っているかと思いますが、主に十代を対象にした、ジュブナイル小説のことです。ライトノベルの定義ははっきりしていません。一応十代を対象とはしていますが、最近では読者層にも広が

無題

りを見せ、ライトノベル出身の直木賞作家などもでています。そう言った、村山由佳さんや、乙一さんと言った作家は、いまやライトノベル界から飛び出して、活躍しています。さて、俺達、小説を書いている人は、たくさんの小説を読まなければお話にもなりません。読めば読むだけ、進歩するといっても過言ではないくらい、成長できるか否かはこれにかかっています。ところが、実際小説を書く人間がライトノベルを読む場合、実は往々にして、勉強になるどころか、むしろマイナスになることが多々あります。その理由は、ライトノベルが、地の文が弱い傾向にあるからです。大半のライトノベルは、大体にして、一般小説よりも会話分が多く、背景描写が甘く、物語の内容にばかりこだわっていて、小説としての体裁が崩れていることが多いです。勿論、前述した、村山由佳さんや、乙一さんは直木賞をとるぐらいなので当たり前なのですが、そのような弱点はありません。そして、いくらかのライトノベル作家にもこのことは、当てはまりません。しかし、それでもそのような作品が多いことは、ライトノベルは一般的に「読みやすく、引き込みやすく、キャラを立てる」ことを大前提としているからであると思います。現在、ジャケット買いなどという、小説の本質とおよそ外れた購入の仕方がなされていることは悲しい限りであり、ライトノベルの多くが、萌を意識したものに移行していることは、昔からのライトノベル読者である俺や多くの人にとっては少し寂しいものがあります。ですが、事実、そのような作品は売れており、面白いのです。だから、読むだけだったら全然構わないです。しかし、素人たる我々が小説を書く技法を学ぶとなれば、そのような作品は適切であるとはいえません。ライトノベルを専攻して書くにしても、ある程度、地の文を、背景描写をしっかりと書くことができるという基盤の上で、ライトノベルは出来るのです。ライトノベル程度ならすぐに俺にだって書ける、というのは大間違いであることは、断言できます。なんだから、話が脱線してしまっていて、申し訳なく…まとめます。これから、小説を書こうというその貴方。ペンを持って（あるいはパソコンのキーボードで）第一文字でも打ち込んだときから、貴方は作家です。趣味にしろ、プロを目指すにしろ、お互いに切磋琢磨して頑張っていきましょう。書き上げた作品を公開する場所として、今はインターネットの投稿掲示板というのがあります。そこでは、手軽に、他人に自分の作品を公開できるほかに、第三者からの感想をもらうことが出来ます。これが、非常にありがたいです。勿論、このような感想の中には、再起不能になるぐらいひどいことを書かれる事があるかもしれません。俺はあります。それはもうひどいことを（泣）です。が、そんなぐらいで一々へこたれては、小説なんぞとてでもないですが書いてはいけません。取りあえず始めのうちには書いてください。ただひたすらに、書き続けてください。そうすれば、自ずと、自分の作品の問題点や、改善すべき点に気づき、より良い作品を書くことが出来るはず…。そして、目指せ、直木賞！（夢ぐらい見てもいいじゃないw）

最後の最後に、俺の大好きな漫画のある登場人物の台詞を入れて終わります。ヒントはJ O J O（答えやん。「やったァーッ ムルヘンだッ！ ファンタジーだッ！ こんな体験できるやつは 他にいねーっ」では、さようなら…。(^ ^)ノシ